

正会員 ○ 中谷 礼仁\*  
同 武田 夏樹\*\*

今和次郎 『日本の民家』 漁家  
小屋 定点観測調査 変容

### 1. はじめに

日本の民家研究の古典とされる<sup>1</sup>書物に今和次郎著『日本の民家』(初版1922年)がある。数ある既往研究のなかでも、近年の研究<sup>2</sup>では、同書の初版刊行までに行なわれた、今による初期民家調査(大正6年-大正11年)の足跡復元がなされ、同書初版に掲載された民家の大半<sup>3</sup>が富裕階級、貧困階級に属さない家であることが明らかにされた。一方で、既往の民家研究の対象は、建築的に充実したものに偏り、今が記録した庶民の農家・漁家の現状は明らかにされることが少なかった。特に、漁家を対象とした研究は従来の民家研究では脱落してきた。<sup>4</sup>そこで本研究では、同書に掲載された民家のうち、特に漁家に注目した。そして、漁家の追跡調査により、大正期からの変容状況を明らかにすることを目的とした。

### 2. 今和次郎の漁家採集と追跡調査

#### 2-1. 今和次郎の漁家採集

ここで、今の初期民家調査の中から追跡調査・分析の対象を選定する。選定基準として

- 『日本の民家』初版で、漁家として紹介された家
- 『日本の民家』初版に紹介された民家で、その存在した集落が漁村であったもの
- 『日本の民家』初版には未掲載だが、その元となった今和次郎の個人スケッチブック「見聞野帖」(以降、野帖)や写真帖<sup>5</sup>で、漁業関係施設として記録されたものを採用した。以下の7軒がそれに該当するものである。<sup>6</sup>

凡例:「民家名」/所在地/今の調査年/出典)

- 「日本海岸の漁家」(新潟県西頸城郡糸魚川市押上村、1917、『日本の民家』pp.163-165)
- 「伊豆大嶋の住家」(東京市大嶋岡田村、1919、同著 pp.133-136)
- 「九十九濱の漁家」(千葉県長生郡長生村、1920、同著 pp.129-131)
- 「南総の家」(千葉県夷隅郡豊浜村部原、1920、同著 pp.131-133)
- 「南阿波の漁家」(徳島県海部郡日和佐町、1920、同著 pp.203-205)
- 「疣のある藁屋根の家」(高知県幡多郡白田川村上川口、1920、同著 pp.205-207)
- 海苔小屋(東京府南葛飾郡宇喜田村、1922「見聞野帖3 南葛飾ノ住居ニ関する調査」)



図1 漁家の所在地マップ

#### 2-2. 漁家の特定

2006年から2010年にかけて、前項で列挙した民家の追跡調査を行なった。その際、漁家の特定根拠には下の6つの指標を採用し、うち2つ以上の指標に適合した場合に、その家が今の記録した漁家であると推定した。

- 所有者の証言:所有者・周辺住民への聞き取りにより、今の記録した民家が過去に存在していた情報を得た場合
- 所有者の一致:「野帖」記載の所有者と現所有者の間に客観的関係(血縁・相続など)を確認できた場合。
- 地名地番の一致:「野帖」に記載された調査地村名・字名・地番の追跡によって民家を特定した場合。
- 周辺環境の類似:今が記録した屋敷形状・方角、周辺地形との位置関係などが現在も確認できる、もしくは過去の写真・絵図に確認できる場合。
- 建物外観の類似:民家外観が類似する場合。増改築後も、建物外観の間数・階数や開口位置が類似する場合
- 家屋規模の一致:建物の平面・断面規模(増改築前の状態を復元した場合、聞き取りから平面を復元した場合も含む)が類似する場合。

これらを指標として実施した追跡調査の結果、4棟の民家を特定することができた。(表1)

	特定	特定根拠
日本海岸の漁家	×	3
伊豆大嶋の住家	×	3
九十九濱の漁家	●	1, 3, 4
南総の家	●	1, 3, 4, 6
南阿波の漁家	●	3, 5, 6
疣のある藁屋根の家	×	3
海苔小屋	●	2, 3, 4

表1 漁家特定結果

### 3. 漁師の家の90年

ここで、前項で特定することができた漁家の概要と現状を記す。

#### 3-1. 「九十九濱の漁家」

所在地は、九十九里浜に沿った千葉県長生郡長生村の半農半漁集落。「野帖」には調査地が字名まで記され、『日本の民家』には、屋敷の俯瞰スケッチと間取りが紹介されている。図2には南を向いた屋敷入口が確認でき、漁家は、屋敷入口の向きと敷地形状を主な手がかりとして特定することができた。(図3)敷地南面と西面は、道路拡幅により削られ、今のスケッチにある屋敷森も消失している。大正期に主屋があった場所には、鉄骨造のガレージ兼倉庫がたち、付属屋があった場所には、新たな母屋が建てられている。

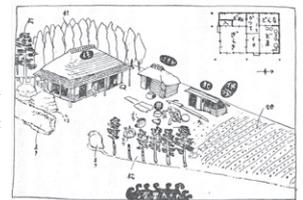


図2 「九十九濱の漁家」

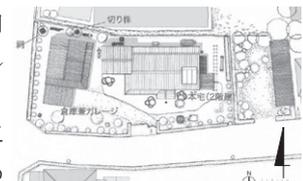


図3 「九十九濱の漁家」の現在

### 3-2. 「南総の家」

所在地は、千葉県勝浦市東部の集落。「野帖」には、民家と周辺環境を含む外観スケッチ1葉のみが記録されている。(図4)海と崖地に挟まれた敷地形状と、敷地前面の小川が特徴で、これらを主な手がかりに特定することができた。(図5)漁家は建替えられ、ほぼ同一の場所に鉄骨造の作業場がたつ。作業場裏の崖は旧景を留めるが、前面の小川は暗渠になっている。海と敷地の間は埋立てられ、防波堤も築造されている。

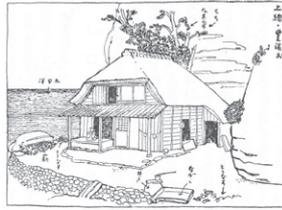


図4「南総の家」



図5「南総の家」の現在

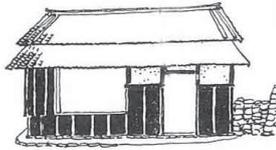


図6「南阿波の漁家」正面スケッチ



図7「南阿波の漁家」現状正面

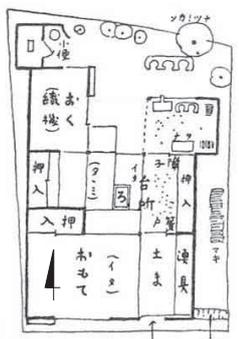


図8「南阿波の漁家」平面

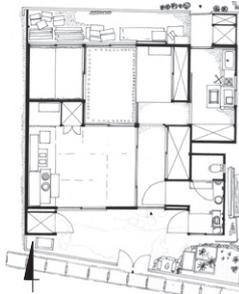


図9「南阿波の漁家」現状平面

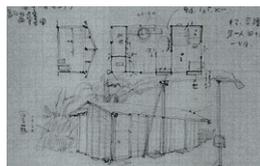


図10 海苔小屋スケッチ

### 3-3. 「南阿波の漁家」

所在地は、徳島県海部郡美波町日和佐。『日本の民家』では、集落の漁師が九州五島まで漁に出ることが紹介され、漁家の外観スケッチと屋敷平面配置図が掲載された。正面の柱や壁には、船と同様に、コーナールが塗られている。(図5)漁家は、正面の規模・建具位置・コーナールによる塗装箇所の類似を主な手がかりとして特定することができた。(図7)建物北側が取り壊され、東側に台所、便所が増築されている。また、西側前面に物置が増築されている。内部は、土間をコンクリートとし、押入れが除去されるなど変更があるが、建具位置などに旧状を留める。(図8, 9) 特定した漁家のなかで唯一、今が調査した当時の建物が残存している事例である。現在は空き家で、物置となっている。所有者が遠方(滋賀県大津)に住んでいることも他の漁家と異なる点である。

### 3-4. 海苔小屋

所在地は東京都江戸川区中葛西。今が『南葛飾郡誌』<sup>7</sup> 編纂委員として参加した調査(1922年4月末-5月初旬)において記録された。「野帖」には、小屋所有者氏名と、外観スケッチ、平面図、小屋のある屋敷の配置図が記録されている。

小屋所有者の屋敷は、所有者名を手がかりに特定することができたが、海苔小屋が存在していたと考えられる土地は、太平洋戦争後の敷地分筆により他者の所有地となっており、小屋も現存しなかった。(図11)

### 4. 分析—漁家の変容過程・要因

調査では、漁家を特定できなかった場合にも、調査地の舟小屋や漁家について、その変容過程を調査した。各事例の変容過程・要因、周辺環境の変化などを比較したものが表2である。各漁家の変容は、周辺環境が変化した1960年代後半から1970年代前半を中心に起こっているが、その主要因は周辺環境の変化(外発的要因)のみで語ることはできない。例えば、「南総の家」の建替は、娘の誕生と消防署の忠告を要因として行なわれた。周辺環境の各漁家の変容には、所有者の意思や集落内の人間関係など、内発的な要因が影響を与えていると推察される。



図11 小屋所有者の屋敷配置図  
点線は敷地境界。網掛け部分は小屋があったと想定される場所

調査事例	現存	現状	現管理者	変容	主な要因	周辺環境の変化
I 氏舟小屋(新潟県糸魚川市)	—	倉庫		屋根変更 1973 増築 1983	バイパス建設 1971-1975	高波 1963, 1970 漁港新設 1973 バイパス建設 1971-1975
K 邸(大島)	—	主屋		屋根変更 1967頃	村の寄合で茅葺廃止決定 1967頃	岡田バイパス開通 1972
「九十九濱の漁家」	×	倉庫 車庫	子孫妻	建替 1968 増築 1978	1950'-80'にかけて蒲田へ行商を営む。その利益で家を建設	道路拡張 1931-1937 道路拡張 1959頃 土地改良 1963
「南総の家」	×	作業小屋	子孫夫婦	空家 1967 建替 1972頃	娘誕生による転居 1967 消防署の忠告 1972	防波堤建設 1953, 1956 公道路拡張 1966 港船上場整備 1972
「南阿波の漁家」	●	空家	子孫(養子)妻	空家 1984-1993		
海苔小屋	×	消失	—			前面用水埋設 1960'

表2 各民家と周辺環境の調査結果、概要

### 5. 結論

今和次郎が大正期に記録した漁家を追跡調査し、その現状を明らかにした。そして、漁家の変容過程・要因を視覚化することにより、漁家を変容させる外発的要因と、より微細な内発的要因の存在が明らかになった。内発的要因による漁家変容の分析は以降、関連発表にて行ないたい。

### 謝辞

今和次郎の「野帖」「写真帖」閲覧に際し、工学院大学図書館石川敬史氏にお世話になった。記して謝意とする。

### 共同研究者・調査協力者について

本研究には発表者2名の他、共同研究者として清水重敦、御船達雄がいる。また調査時には、『日本の民家』初版掲載の民家を再訪問する「歴史青年会」と漁家所有者から協力を受けたことをここに記し、謝意とする。

註 1 太田博太郎『建築史の先達たち』彰国社 1983、藤森照信「解説」今和次郎『日本の民家』岩波書店 1989)らが指摘している。  
2 石垣敦子「今和次郎による初期民家調査の足跡復元及び『日本の民家』の再評価」(2006)  
3 『日本の民家』に掲載された家のうち、「木曾街道の豪農の家」(第三版、相模書房 1943より掲載)のみが重要文化財に指定された。  
4 御船達雄「民家研究 50年の軌跡と民家再生の課題」『2005年度 日本建築学会大会 歴史・意匠部門 パネルディスカッション』配布資料 p.3 1.7 「研究対象の拡大に目を向けると、漁家・漁村については、未だ調査研究の余地が残されていることは疑いない。」  
5 工学院大学図書館 今和次郎コレクション所蔵  
6 民家名は『日本の民家』初版掲載のものとした。海苔小屋は同著不掲載のため、「見聞野帖」記載の小屋名を用いた。民家所在地名は、大正11年当時のもの。「南総の家」「疣のある藁屋根の家」は、題名に漁家と記されていないが、文章中に「漁家」の記述があり、漁家と判断した。  
7 『南葛飾郡誌』南葛飾郡役所 1923.12  
図版典拠 図2. 『日本の民家』初版 p.130 図3. 儀部真二作成 図4. 『日本の民家』p.132 図6. 『日本の民家』p.204 図7. 発表者撮影 図8. 『日本の民家』p.204 図10. 工学院図書館所蔵 今和次郎「見聞野帖」図11. 本間智智作成 他、武田夏樹作成・撮影

\* 早稲田大学創造理工学研究所 准教授・博士(工学)

\*\* 早稲田大学

\*Associate Prof, School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ. Dr. Eng

\*\* Waseda University